

『メロン・タイム』

著作 a s h

※この話は『kanon』を元にした二次創作です。

夏も近づいたある朝のことだった。

俺は秋子さんがいれてくれたコーヒーを飲みつつ、ごく普通のバタートーストをかじっていた。

名雪は…まあ、いつものように半分寝ながら器用にジャムをたっぷり塗ったトーストを口に運んでいた。

そんないつもの光景の中で、ふと秋子さんが、何気なく話し始めた。

「そう言えば、知り合いがメロンを送ってくれると言ってたんですけど、祐一さんはメロン平気ですよね？」

「メロン？ ああ、俺はあのこう何て言うか、しわくちやのいっぱいあるヤツは平気ですよ。つるつるのはあまり好きじゃないですけど」

今どきはあんまりつるつるのヤツは見ないけど、何となくあっちは好きじゃなかったの
で、正直にそう答えると、いきなりそれに名雪が反応を示す。

「どっちもおいしいよー…」

声のした方を見ると、いきなり名雪が起きているじゃないか。どうやら名雪はイチゴだ

けじゃなく、メロンもいける口らしい。

「そうですか。それなら大丈夫ですね」

秋子さんは笑顔で答えて、それ以上は何も言わない。

「ねえ、お母さん。それじゃ、アレもあるの？」

アレ？

って、何だ？ と俺が訊こうと思つて口を開くよりも先に、秋子さんが笑顔で名雪に答えていた。

「ええ、今年も一緒に送ってくれるそうよ」

秋子さんは何となく嬉しそうだ。それに対して、名雪はちよつと引き気味な感じがする。俺も何となく訊くのが怖いのが、ここで訊いておかないと後で思いつきり悩むに違いない。

「アレって何だ？」

「ん、祐一は知らなかったよね。あのね、メロンの漬け物なんだよ」

はい？

メロン…の、漬け物ですと？

って、待て待て。

「メロン？」

「うん」

「の、漬け物？」

「そうだよ」

そうだよって、あんた…。あの、メロンの、漬け物ですか？

一体どんな代物なんだよ、それって。

ちよつと想像してみよう。

あの甘いメロンを…漬ける…ってジャムですか？ それ？

うーむ…これ以上は考えたくない…。

って言うか、食べたくないよな、それは…。

「おいしいですよ」

秋子さんがさり気なくひとこと付け加えていたが、それはやはり「メロン」ではなくて、「メロンの漬け物」のことなんだろうか。

しかし、だ！

秋子さんにはあのジャムの一件があるので、「おいしいですよ（ニコツ）」だけですませるのは危険すぎる。

「…名雪はどうなんだ？」

「わたしはあまり…」

名雪は困ったように笑ってそれ以上を言わない。うーむ…秋子さんよりはまともなはずの名雪があんな顔を見せるとなると…これはやはり危険なのかも…。

そうだな…とりあえず、わけの分からないものは食べない方がいいに決まってる。

秋子さんには悪いが、俺はちゃんとしたメロンの方だけを頂くとしよう。

「あ…」

秋子さん、俺は普通のメロンだけでいいですよ…と言おうとした矢先、まるでタイミン
グを計っていたかのように、秋子さんは最上級の笑顔で俺に向かって口を開いた。

「届いたら、さっそく今夜にでも出しますね。短い間しか食べられないものですから」
「……」

その後の俺の言葉は何も出なかった。いや、出せなかった。出せるわけないって……。それからはもういつものように、時間がなくて学校まで走って行き、これまたいつものように適当に授業を受けて、大したこともないまま一日が、文字通りに「あっ」と言う間にすぎようとしていた。

「いきなり放課後になってしまった」

「ずっと寝てるからよ。それじゃ名雪と全然変わらないわよ、相沢君」

独り言のつもりが香里に突っ込まれてしまったが、別にずっと寝てたわけじゃない。

「名雪と一緒にするな。俺は俺で凄く真剣な悩みごとがあったんだよ」

そう、朝からずっと俺の頭を離れなかったのは、やっぱりアレのこと、メロンの漬け物だ。

「へえ……相沢君が、ねえ……」

「……何だよ、その何か言いたげな顔は」

「別に。相沢君の悩みって言っても、大したことじゃないんでしょ？ 大方、晩ご飯のおかずは何だろうなうってくらいなの……」

「な、何故分かるッ？」

「本当にそうだったの？ ……小学生じゃないんだから、そんなことで悩んでるヒマあるの？」

心底呆れたような表情で香里がつぶやいた。その声には侮蔑の色も含まれていたような

気がする…。

と、俺が香里の心ない言動に傷ついて黙っていると、文字通りに脇から別の声が届く。

「そうだぞ。俺たちは受験生だつてことが分かってないんじゃないか？」

北川だ。偉そうに言つてはいるが、こいつも授業中にろくにノートを取っている気配はなく、ただ悶々と香里の方を見ていただけのよう気がする。

「あら、そう言う北川君は分かつてるのかしら？」

「もちろんだ。俺は受験生として大事な時期の今、ちゃんと考えて行動してるからな」

「で、その行動つてのは何だよ？」

「これから美坂と一緒に勉強だ」

「あたしは帰るんだけど」

自信満々に言い切る北川に対して、香里は「何のこと？」ってな顔であっさりと冷たく答えている。それでも、北川はめげている様子はない。

「美坂の部屋で勉強だ」

「…何の勉強だ、何の」

「そりゃもちろん、人生のさっ！」

ドンと胸を叩きながら、実に堂々とした態度で言い切る北川君、キミは本当に救いようのない男だな…。

「…二人でやつててちょうだい。とにかくあたしは帰るから」

「あ、ちょっと待てよ、美坂！ 相沢と二人じゃ人生の勉強はできないぜ！」

「そう言う問題じゃないだろーが…」

と言うか、そもそも一体何がお前にとつての「人生の勉強」なんだ、北川よっ！ と言う俺の中に湧き出た疑問に答えるはずもなく、

「そんなわけで、俺も帰る。じゃあな」

とだけ言い残して、北川は香里の後を追うように出ていった。

「まあ、せいぜい人生の苦みを学んでくれ、北川」

と、そう言えば、さつきから名雪が会話に入つてこなかったみたいだが…。

「くー…」

名雪はまだ机に突っ伏したままだった…。

ふと先ほどの香里の言葉が胸に刺さってくる。

「…俺たち本当に受験生なのか？」

まあ、それはこの際置いておこう。受験生だからって勉強以外に何もしちゃいかんってことでもないし、学校がすべてじゃないんだからな。

とりあえず名雪を起こした後、俺は…：ひとまず商店街へと足を運んだ。

目的は一つ、食料の確保。理由は言うまでもなく、今晚の食事をキャンセルするためだ。名雪に話せば絶対一緒に来ると言い張るに決まっていたので、そのことを何も言わずに部活へと送り出したから、大丈夫なはずだ。まあ、確かに秋子さんの料理じゃなくて、パンとか菓子なんかで凌ごうと言うのは、ちょっとつらいかも知れない。しかし、得体の知れないメロンの漬け物を食べる羽目になるよりは…：かなりマシだ。

とにかく、俺は目標のコンビニの看板を見つけると、そこに向けて軽く走り出し…：た瞬間だった。

「あら、祐一さん、めずらしいですね」

その声は、まごうことなく秋子さんのもの。

一瞬にして硬直した俺の様子を特に気にする風でもなく、秋子さんはにこやかに俺の方にやってきた。片手に買い物袋を提げているところを見ると、買い物帰りらしい。

「あ…秋子さん……」

「今日はちよつとゆつくりと買い物してたものだから、遅くなっちゃいましたけど、祐一さんと商店街で会うのは珍しいですね」

どこか嬉しそうにする秋子さん。そりゃ普段はあまり出会わない場所で身内に会ったりすると、何でもないのに嬉しくなったりするのは、分かる。

分かる…けどな。

どうして、こうタイミングが良すぎるんだよッ！

いや、ここで秋子さんに付き合う必要はないんだ。俺は用事がありますからって言って離れればいいんだよ。何も店はコンビニだけじゃねえし。

…と、俺が何気なく秋子さんの様子を見ると、

「ふう…。さすがにちよつと買いたみたいですね」

などと言いながら、買い物袋を持つ手を替えたりしている。

……ダメだね、こりゃ。

こんな状態の秋子さんを置いて、「じゃあー」なんて爽やかに言えないよ、俺は。

つか、もしかして、秋子さん…狙ってやってるんじゃないや…ま、いいや。深く考えるのはよしておこう。

「俺が持ちますよ」

「え、祐一さんは用事があるんじゃないんですか？」

うっ…、まさかそう言われるとは…。でも、今さら引き戻せないよな、男としては。こ
うなったら、メロンの漬け物については古典的な手を使うしかないな…。

「いえ、もうとつくにすんでいて、ただぶらぶらしていただけだったんですよ」

「そうですか、それじゃお願いしますね」

密かに今後の対策を決めた俺は買い物袋を受け取り、終始笑顔のままだった秋子さんと
一緒に家路についた。

そして、夕食の時間も迫ってきた頃。

俺はおもむろにベッドに潜り込んだ。

本当は全然眠くなかったが、寝た振りを決め込んで過ごしてしまおう、と言う実には後ろ
向きな作戦だったりする。これが通用するかどうかすべては、名雪次第なんだが。

しばらくして、名雪が俺の部屋にやってくる足音が聞こえた。

「祐一、ご飯だよ」

言いながらドアを開けたものの、俺はひとまず寝た振りをしてそれには答ええない。

「あれ？寝てるの？」

名雪が近づいてくるようだ。でも、答ええない。

「祐一」

名雪の声が近くなる…。でも、当然答ええない。

「うーん…。」

困ったような声。まだまだ、答えない。と言うか、もう一押しだな、これは。

と、俺が密かに勝利を確信した時だった。

「祐一？」

突然名雪の声がとてつもなく間近に感じられた。…と言うより、その声と共に名雪の吐息が…俺の顔に……。いきなりの接近に、思わず俺の鼓動が速くなった。

ど、どうなってるんだ？ と思っていたら、さらに名雪の体温までも感じるほどに、俺の顔に近づいているのが分かった。

わ、びっくりだよ。

と、名雪の真似なんか心の中でしてみても、俺の動揺は収まりを見せようとはしない…って、当たり前だ。

だいたい名雪がこんな大胆な行動を見せるなんて思いもよらなかったんだから、パニックにもなるさ、と言うより理性だって…飛んでいつちまいそうになるさ。

とりあえず、ここが我慢のしどころと思って、俺は耐えた。心なしか熱い。すでに寝た振りをしている意味があるのかないのかも分からないが、ひたすら耐えた。

やがて。

「祐一…」

優しい口調で名雪が俺の名を呼んだ。

そして、俺の頬に両手を添えて…俺の顔の向きを変えさせる。

目をつぶったままだったので、詳しい状況は分かるものではないが、この状態はまるで……。

やがて、名雪の吐息が鼻先に感じられるほどになり……。

ま、間違いない。

ちくしょう、なんてこったい！ 名雪がこんなに大胆な行動に出るなんて、さすがの俺にも読めなかったぜ！ て言うか、秋子さん、あなたは娘にどんな教育をしてきたっーんですかいッ！

こうなったら、俺も覚悟を決めるぜ、名雪。

と、俺が目を開けた瞬間、

名雪は俺の……おでこにピタツと自分のおでこを当てていた。

「あ」

当然ながら、名雪と俺の視線が、ごくごく短い距離で交差する。

「…」

一瞬の沈黙。

そして、大きな瞳そのままにして、

「わ、びっくりだよ」

全然緊張感のない感嘆の言葉を告げる名雪。そう言いながらも、体勢はさっきと何も変わっていない。

「名雪：放してくれないか」

「あ、ごめん」

ようやく俺の顔は名雪の手から解放されたものの、顔の距離はまだ近いまま。

「…って、もうちょっと離れてくれないと、話しづらい」

情けないことに俺の心臓は未だに激しく脈打っている。もしかしたら、顔も赤いのかも知れない。

「寝てるかと思っただけだ」

そう言いながら、名雪はようやく顔を離す。

「寝てる俺に何する気だったんだよ？」

「わ、わたしは別に……ただ、熱があるのかなーって思っ……」

とか言いながら、名雪の方こそ熱がありそうなくらいに顔を赤くしている。

「熱って……」

あるわきやないだろ……と言いついそうになったところで、今日これからのことを思い出した俺は、ふとそれも言い訳になりそうだと思いついた。

「だって、顔赤いよ、祐一。触ってみたら、何となく熱くなっていたし……」

「……あるのかも知れないな、確かに」

「そう？ なら寝てなくちゃだめだよ」

「ああ、そうだな。何となくだるい感じがするから、悪いけど俺はこのまま寝させてもらうよ」

「晩ご飯はどうするの？」

「あまり食いたいと思わないから、今晚はやめとくよ。何だか腹もすつきりしないし」

「わたし、何か作ってこようか？」

名雪はすっかり真剣に俺のことを心配してくれているが、あまり大げさにするとかえってよくないので、ちよつと気をつけないな。

「いや、お前は秋子さんと晩ご飯食べていいぜ。別に腹減ってるわけじゃないし、そんなにつらくもないから、心配するな。ちょっとした寝不足で感じだな」

「本当に平気？」

「ああ、とりあえず寝かせてくれれば、それでいいさ」

本当は腹が減ってきたのだが、いま名雪と一緒に一階に下りてしまつては意味がない。

とにかく「眠いのだ」と言うことを強調するようにしてみせると、名雪もさすがに眠気に関してはよく理解できるらしく、

「それじゃあ、わたしはご飯食べてくるけど、祐一も起きたら来てね」

心配そうな表情はあまり変えないものの、ゆっくりと俺のそばを離れていった。

偉いぞ、名雪。さすが睡眠魔人だ。

名雪の離れる足音を確認しつつ、俺は今さらのようにわいてきた空腹感をおさえるように、ベッドの中で丸くなった。

ふう…。

ちよつと暑い感じもするが、今しばらくはじつとしていなくてはならない。名雪の話も聞けば、秋子さんも様子を見に来るかも知れないし、とにかくしばらくは「熱っぽくてだるい」雰囲気を出さなくてはいけないのだ。

頑張れ、俺。

って、嫌いなものから逃げる子どもと何も変わらないのだが、それはそれ。とりあえず手がこれしかなかったんだから、しょうがない。

……。

静か、だな。

あれからしばらく経つても、秋子さんたちが来る気配はない。かと言って、一階からの声がここまで届くはずもない。

何となく、拍子抜けだな、こりや。

まあ、秋子さんのことだから、「今はそっとして置いてあげましょうね」とか笑顔で言ってくれてるに違いないな、きつと。

ま、いいや。

それならそれで、ひとまずは：本当に寝るとするか。どうせ他にすることもなし、マンガとか読んでいるのを見つかったら、名雪に怒られそうだしな。

そんなわけで。

ひとまず、就寝。

(中略)

……って言って、すぐに眠れるほど名雪じゃないぞ、俺は。

こんな時だけはある名雪の体質がうらやましいと思う、と言うのも、文章ではほんの数行しかないが、「ひとまず、就寝」と決めてから、すでに結構な時間が過ぎていくからだ。

眠れない理由は簡単。

腹が減ってしまった、ただそれだけなのだ。

やはりあの時、何とでもして、秋子さんと別れてコンビニなりに行くべきだったのだ。いやいや、あの重そうな荷物を持つ秋子さんを放っていけるのは、オニだよな、オニ。

「ふう……」

と、俺が小さくため息をもらした時だった。

カタン、とドアの向こう側にかすかな物音がした。

何だと思つて、俺がドアの向こう側に神経を集中していると、すごく控えめな足音が遠のいていくのが分かった。

時計を見ると、午後十一時四十一分。

名雪が起きている時間じゃない。

秋子さんしかいないわけだ。で、秋子さんが何の用もなしにここまできて、何もせずに戻るはずがない。

と、すると、だ。

俺は静かに起き出して、ゆっくりとドアを開けてみた。

すると、廊下にはお盆が置かれていた。もちろん、その上にどんぶりと小鉢と箸にレンゲもある。

そして、どんぶりの下にメモ書きが。

『調子が良くないと言つても、何も食べないのはかえってよくないですよ。少し冷ました雑炊と香の物を置いておきます。食欲があつたら、食べて下さいね』

ううっ……。

病気の時は人の情けが骨身にしみるとは言うけれど、これはまさに地獄に仏、名雪に枕と言ふものだ。

秋子さん、ありがとう…。

と、ひとしきり感謝の念を捧げたところで、何はともあれ、俺は構わずそれを頂くこと

にした。当たり前だ。さっきから腹が減ってたまらなかつたんだから。

「部屋の中にお盆を運び、ドアを閉めてから、ゆっくりと嘔みしめるように、雑炊をレンゲですくって口に運ぶ。」

う……うまい。

まさしくそれ以上の表現が思いつかないほどに、うまい。少し冷ましてあるので、フー言いながら食べる風情がないのが残念だが、そんなことよりも絶妙なダシの味が舌に残って、何とも言えない至福感を醸し出しているぞ。

小鉢にあつたのは香の物と言うことだが、見るとキュウリか何かみたいだった。まあ、とりあえず一つを箸でつまんで、口に運んでみる。

これも結構いけるな。しょうゆ風味って言うか、浅漬けとはちよつと違うような感じだけど、その味の割にはあつさりしている。ややすすくちの雑炊にはちよつどいい具合に合うな、これは。さすが秋子さんだ。

こうして、俺は味を堪能しつつも、わずか数分で器を空っぽにしていた。

「ふう……ごちそうさまでした」

秋子さんに感謝しつつ、どんぶりをお盆に置く。

そう言えば、お茶か何かが欲しいような……。お盆にはそれらしいものはなかつたよな、確か。まあ、お盆を台所に置きに行くついでに、何か探すとするか。

静かに自分の部屋を出て、俺は一階の様子をうかがいながら、台所に向かう。

台所の方はすでに明かりが消えていて、秋子さんも自分の部屋にでもいるようで、居間や食堂には気配すらない。

ひとまず、台所の明かりをつけると、流し台の脇に小さな急須と湯飲みが置いてあった。お盆を流し台に置き、脇にあった急須を持ってみると、重い。どうやら中身があるようだ……と思ったら、またも小さなメモ書きがあった。

『冷たいものは良くないと思いますから、これで我慢して下さいね』
さすがです、秋子さん。

湯飲みに急須の中身を注いでみると、前にも飲んだことがある中国茶らしい。もちろんノンカフェインで夜も安心してやつだ。

湯飲みに注いだお茶をゴクゴクと飲み干して、湯飲みと急須を流し台に置いて、自分の部屋へと戻っていった。

洗い物はたぶん秋子さんが朝にでもやってくれるだろうし、さすがに夜中に台所でちやかちやと物音を立てるのはよくないだろう？

何だか言い訳みたいだが、これは秋子さんたちに対する俺流の気配りと言うものだ。

まあ、何はともあれ、腹もふくれたことだし、これでようやく眠れそうだ。とか言いながら、俺は名雪じゃないから、「ボタン、くー」とは行かないけどな。

……くー。

(中略)

何と、気がついたら、朝だ。

名雪じゃないぞ、とか思っていたら、いきなり朝になっていたなんて……まあ、偶然だろう、きつと。そう言うことにして、深く考えるのはやめておこう。

俺が一階に下りて、食堂に顔を出すと、そこには珍しく名雪の姿があった。そして、秋

子さんの姿がなかった。

「あれ？」

「おはよう、祐一。今朝は調子はどうか？」

「いやまあ、それはいいんだが、何でお前がいるんだ？」

「うー、わたしだって一人で起きられるもん」

「…ま、いいけどな」

と、ちよつとだけ動揺しながら、俺が食卓につくと、名雪がいきなり何か思い出したよ
うな表情を見せた。

「あ、そうだ」

「何だよ？」

「祐一は食べちゃったんだよね」

「何をだ？」

「メロンの漬け物だよ」

「は？ いや、昨夜は遅くに秋子さんが作ってくれた夜食を食べただけだぞ」

「うん、だから食べたんだよね。わたしは普通の浅漬けの方が好きだけど、祐一はどう
だったの？」

「ん？ どうって、何が？」

「だから、メロンの漬け物だよ」

って、それは俺は昨日食べてないはずだが…。さつきからどうもうまく会話がかみ合っ
てない気がする。

……って、ちょっと待てよ？

「なあ、名雪」

「なにかな？」

「…あのさ、メロンの漬け物つてさ、あのキュウリみたいなヤツのことか？」

「うん。どちらかと言うと、白瓜に似たような感じなんだけど、わたしは白瓜もあまり好きじゃないから…」

ぐはっ。

何てこったい！

あの、昨日の夜に、「うまいうまい」って食ってたアレが、メロンの漬け物だったなんて……。

「どうかしたの、祐一？」

「…何でもねえ」

あまりの衝撃的な事実を前にして、俺はそれ以上言う気力を失っていた。

アレならアレだと先に言ってくれよ。昨日抱いていた俺の妙な想像は何だったんだよ、

まったく……。

と、俺が力なく椅子にもたれかかっているところに、秋子さんが姿を見せた。

「祐一さん、おはようございます。今日は調子は……あら、まだちょっと元気がないみたいですけど、大丈夫ですか？」

俺の様子を見るなり、少しだけ心配そうな表情を見せる秋子さんだったが、いや別に調子が悪いわけじゃないので、ここはひとまずちゃんとせねば。

「あ、いえ、ちょっと名雪の寝ぼけに呆れていただけです。昨夜の雑炊のおかげですっかり元気になりましたよ、ありがとうございました」

「わたし、寝ぼけてないよー」

横から名雪が口をはさんでいるが、今は無視だ。

「で、秋子さん。昨日のあの香の物つてのは、メロンだったんですか？」

別に名雪を信用してないわけじゃないが、念のために確認しておきたかったので、あえて訊ねてみると、秋子さんは笑顔に戻って答えてくれた。

「ええ、そうですよ。摘果された小さいメロンを漬け物にしているんですけど、産地以外ではあまり見ない物なので、と言うことでいつも一緒に送ってくれるんですよ」
なるほど…。

メロンと言っても、小さくて固いうちのものだから…：白瓜みたいと言う名雪の言葉にも納得できるよな、そりゃ。

やれやれ…。

俺の妙な想像は取り越し苦労ってわけか…。

まずはよかったな、本当に。

「ふう…」

「どうしたんです？　ため息なんかついて」

思わず出してしまった俺のため息を見て、秋子さんがちょっと気になった様子で訊ねたが、俺はそれに苦笑で返した。

「あ、いえ。メロンの漬け物って聞いた時に、俺は思わず、あの大きくて熟したメロンの

方で想像しちゃったんですよ。でも、そんなの——

「あらあら」

秋子さんが笑う。

そりゃ、そんな想像をしてたなんて言われれば、笑うしかないだろう。

だが、俺が「でも、そんなの食べたいとは思わないですよねー」って笑うつもりだったのに、それよりも先に秋子さんの言葉が続いた。

「そう言うのも試しに作ってみたんですけど、食べますか？」

は？

思わず俺の声が途切れる。

秋子さんは、いつもと変わらない笑顔のまま。どう見ても、冗談です、と言う感じではない。

傍らの名雪を見ると、「あーあ……」と、あきらめとも言える表情を見せているような感じがした。

まるで、時が凍り付いたような感じのする中。

秋子さんは笑顔のまま、冷蔵庫の方へと歩いていき、中から何かを出してきた。

どうやら、メロン・タイムはこれからが本番らしい。

あとがき

季節ネタですよ、一応。

メロンの漬け物は本当にありますが、秋子さんが最後に出したものは、たぶんありません（笑）と言うか、見たことありません。

ネタとしては「メロンの漬け物」と言うものを知らない人が聞いたら、どんなイメージを持つかと言う点に集約しているので、知っている人にはあまり面白みはないかも知れませんが。地元では大体六月頃にこれが出回ったりするので（近くにメロン産地がある）自分のごく普通に感じられますけど。

キャラについて若干の違和感があるかも知れないですけど、今回はショートショート風な味付けで行ってるので、こんなものです。本当はこれ、どこかに寄稿しようかとも思ってたんですが、受けるかどうか分からないものを他人様に預けるのも何だと思いついて、自分のトコに出すことにしました。

2001/07/11 初版 ash

2001/08/02 一部修正 ash

PDF書式変更:2016/05/19